

令和3年度自己評価シート(年度末評価)

校番	091	学校名	広島県立庄原実業高等学校	校長氏名	八幡 茂見	☉・定・通	☉・分
----	-----	-----	--------------	------	-------	-------	-----

1 中期(3年間)経営目標及び短期(本年度)経営目標

【中期(3年間)経営目標】 (1) 社会に貢献できる人材の育成 (2) 社会をリードする農業教育の充実 (3) 信頼される学校	評価			総合評価 B
	1年目	2年目	3年目	
	B	-	-	
【短期(本年度)経営目標】 (1) 社会人基礎力を育成する。				
【評価指標】 ○服装検査において指導を受けなかった生徒の割合 ○時間厳守 登校遅刻をしていない生徒の割合 ○整理整頓 生徒による学校環境整備週間実施回数 ○挨拶励行 生徒対象アンケートによる肯定的評価の割合	前年度 現状値	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
	新規	70%	59.5%	B
	新規	70%	49.1%	
新規	5回	5回		
新規	95%	93.4%		
【短期(本年度)経営目標】 (2) 豊かな心を育成する。				
【評価指標】 ○生徒個別面談週間における面談実施回数 ○一人当たりの年間貸出冊数	前年度 現状値	本年度		評価 A
		目標値	実績値	
	新規	6回	6回	A
	新規	0.5冊	0.5冊	
【短期(本年度)経営目標】 (3) 進路実績を向上させる。				
【評価指標】 ○第一希望達成率 ○学科特性に適した進路実現を果たした生徒の割合	前年度 現状値	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
	89.1%	90%	88.4%	B
	55.6%	50%	45.5%	
【短期(本年度)経営目標】 (4) 主体的で深い学びを実践する。				
【評価指標】 ○専門科目におけるPBL実施率 ○アグリマイスタープラチナ取得生徒数	前年度 現状値	本年度		評価 D
		目標値	実績値	
	新規	95%以上	18%	D
	新規	4名以上	2名	
【短期(本年度)経営目標】 (5) 地域と協働した教育を実践する。				
【評価指標】 ○庄実版デュアル派遣実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合 ○インターンシップ実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合 ○教科横断的な授業実践を行った科目数 ○地域の産学官との協働研究数 ○地域との交流学習の実施回数	前年度 現状値	本年度		評価 B
		目標値	実績値	
	90%	80%	125%	B
	90%	80%	125%	
	新規	3科目	4科目	
	新規	7件	9件	
新規	8回	1回		
新規				
【短期(本年度)経営目標】 (6) 情報発信を積極的に行う。				
【評価指標】 ○マスコミ(テレビ、新聞等)への出現数	前年度 現状値	本年度		評価 A
		目標値	実績値	
	22回	30回	37回	A
【短期(本年度)経営目標】 (7) 業務改善を推進する。				
【評価指標】 ○勤務時間外在校時間が年間360時間以下の教職員の割合 ○年休を15日以上取得した教職員の割合	前年度 現状値	本年度		評価 A
		目標値	実績値	
	新規	50%	60%	A
	新規	24.5%	36%	

2 年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期(3年間)総合目標	成果	<p>(1) 社会に貢献できる人材の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各クラスにおいて、複数の教員で検査指導に当たる体制を確立し、3訓「時間厳守・整理整頓・挨拶励行」を実践（徹底）することにより、主体的に「今日、就職試験に行くことができる言動」を考える生徒の育成につながってきている。 ○ 学校全体として取り組む面談週間を設定したことにより、すべての教員で生徒の状況を確認し、生徒と教員の良好な関係につなげることができた。このことにより、安全・安心な学校づくりの推進につながってきている。また、図書室の主体的な利用により、豊かな心の育成につながってきている。 ○ 進路指導に関わって、今年度の第一希望達成率においておおむね達成できた。 <p>(2) 社会をリードする農業教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 未来思考型PBLを第1学年の全学科で実施し、主体的な学習に向かう資質・能力の育成を行うことができた。また、アグリマイスター取得者は前年度比200%を超え、全国農業高校校長会より学校表彰を受賞した。プラチナを取得した2名はアグリマイスター顕彰生徒特別表彰を受賞した。各種の取組が主体的で深い学びにつながってきている。 ○ キャリア教育と教科横断的な学習を関連付けた教育課程を実践することにより、実習受け入れ先の県立広島大学に2名の生徒が進学し、実習受け入れ先の会社に1名の生徒が就職した。学科内で報告会を実施することにより、学びの共有が図られ、参加生徒以外の生徒の積極的な学習動機付けとすることができた。また、普通教科の教諭と専門科目の教諭で教材の共有化を図り、授業を実施することができた。地域の産学官と連携した教育活動として、協働研究を実施した科目「課題研究」でのプロジェクト学習においては、専門性の学びをより深化させることができた。 <p>(3) 信頼される学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 適時的な情報発信と提供をすることにより、新聞32回、テレビ2回の合計34回の出現数となり、目標値を達成した。このことにより、信頼される学校づくりにつながってきている。
	課題	<p>(1) 社会に貢献できる人材の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 遅刻を繰り返す生徒について、分析したところ、ネットゲーム等への依存が一因となっていることから、情報機器に関するマナー教育の徹底が課題である。 ○ 生徒の進路希望を実現するために、難易度が高い進路先にも合格できるように1・2年生の時から進路に向けての意識を高め、計画的に学習に取り組むことができる生徒を育成する必要がある。 <p>(2) 社会をリードする農業教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 各科目内でのPBLの実施率が低いことが課題である。 ○ 学校農業クラブの各種競技会での成績上位者や取得困難な資格取得者に対する学習支援体制をより一層確立していく必要がある。 ○ 地域の産学官と連携した教育活動を実践するために、マイスター・ハイスクールCEOと連携して、協働研究をさらに活性化させる必要がある。また、新たな交流学习の実施方法を提案していく必要がある。 <p>(3) 信頼される学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校全体として、一人一人が当事者意識を持ちながら学校の魅力を適時的に情報発信していく意識を高めていくことが今後へ向けてより必要である。 	

	短期（本年度）経理目標 成果	<p>(1) 社会人基礎力を育成する。</p> <p>○服装検査において指導を受けなかった生徒の割合 服装髪検査で1回も指導を受けていない生徒は59.5%であり、目標を下回った。特に2学期からの違反が目立ったが、毎週末の検査指導を徹底してきたためでもある。各クラスにおいて、複数の教員で検査指導に当たる体制は確立できてきた。</p> <p>○時間厳守 登校遅刻をしていない生徒の割合 1年間登校遅刻をしていない生徒の割合は49.1%であり、目標を大きく下回った。コロナ禍の中、体調管理等に課題が見られる家庭も多く、11月以降の遅刻が大きく増加した。挨拶運動の実施などを通して、生徒に時間を守る意識を定着させる指導体制が整ってきた。</p> <p>○整理整頓 生徒による学校環境整備週間実施回数 年間計画に組み込んだ当初の目標どおり5回実施できた。美化委員会を中心に、生徒の主体的な行動を促すことができた。</p> <p>○挨拶励行 生徒対象アンケートによる肯定的評価の割合 生徒対象アンケートの結果は93.4%で目標値に届かなかったが、全体的に挨拶をする習慣は定着している。毎週金曜日に実施している生徒会執行部による挨拶運動も定着し、少しずつではあるが、意欲的に挨拶する生徒が増えてきている。</p> <p>(2) 豊かな心を育成する。</p> <p>○生徒個別面談週間における面談実施回数 長期休業明け（春休み明け、夏休み明け、冬休み明け）と各学期末に面談週間を設定し、面談を実施した。学校生活、進路等の悩み等について担任及び担任が面談を行った。学校全体として取り組む面談週間を設定したことにより、すべての教員で生徒の状況を確認し、生徒と教員の良好な関係につなげることができた。</p> <p>○一人当たりの年間貸出冊数 一人当たりの年間貸出冊数は、目標値の0.5冊に達した。授業で利用の多かった2年生は、自身の学習課題に沿った本の活用や読書傾向の多角化など、次年度に向けての伸びが期待できる。3年生は、長期休業中等の図書室利用が多く、進路対策での活用以外に気分転換に読書する生徒もおり、常駐により開館体制が確立されたことによる成果であると捉えている。</p> <p>(3) 進路実績を向上させる。</p> <p>○第一希望達成率 今年度の第一希望達成率は88.4%である。目標値までは到達しなかったが、おおむね達成できた。</p> <p>○学科特性に適した進路実現を果たした生徒の割合 学科特性に適した進路を実現した生徒の割合は45.5%であった。目標値の50%には届かなかったが、おおむね目標を達成できた。</p> <p>(4) 主体的で深い学びを実践する。</p> <p>○専門科目におけるPBL実施率 未来思考型PBLを全学科の第1学年、科目「農業と環境」で実施した。また、アグリビジネスアイデアソン、学習成果発表会を実施し、外部と連携をした学習により生徒の学習に向かう内発動機付けを行い、主体的な学習に向かう資質・能力の育成を行うことができた。</p> <p>○アグリマイスタープラチナ取得生徒数 アグリマイスター取得者が全体で37名であり、プラチナ2名、ゴールド6名、シルバー29名であった。そのため、アグリマイスター取得者は前年度比200%を超え、全国農業高校校長会より学校表彰を受賞し、プラチナを取得した2名はアグリマイスター顕彰生徒特別表彰を受賞した。</p> <p>(5) 地域と協働した教育を実践する。</p> <p>○庄実版デュアル派遣実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合 実習受け入れ先（県立広島大学）に2名の生徒が進学したことが成果である。学科内で報告会を実施することにより、学びの共有化が図られ、参加生徒以外の生徒の積極的な学習動機付けとすることができた。</p> <p>○インターンシップ実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合 実習受け入れ先（株式会社）に1名の生徒が就職したことが成果である。学科内で報告会を実施することにより、学びの共有化が図られ、参加生徒以外の生徒の積極的な学習動機付けとすることができた。</p> <p>○教科横断的な授業実践を行った科目数 各学科で授業実践を行った科目数は生物生産学科1科目、食品工学科1科目、環境工学科1科目、生活科学科1科目であった。普通教科の教諭と専門科目の教諭で教材の共有化を図り、授業を実施することができた。</p> <p>○地域の産学官との協働研究数 協働研究数は生物生産学科4件、食品工学科1件、環境工学科3件、生活科学科1件、合計9件であった。協働研究を実施した科目「課題研究」でのプロジェクト学習においては、専門性の学びをより深化させることができた。</p> <p>○地域との交流学習の実施回数 交流学習の実施回数は生活科学科1回のみであった。多くの交流学習先がコロナ禍において、地域社会状況を鑑みて交流を取りやめたが、これまでの学習形態を継続するために、校内の生徒同士での交流を実施することができた。</p> <p>(6) 情報発信を積極的に行う。</p> <p>○マスコミ（テレビ、新聞等）への出現数 新聞32回、テレビ2回の合計34回の出現数となり、目標値を達成した。また、本校ホームページの更新回数は、100回であった。</p> <p>(7) 業務改善を推進する。</p> <p>○勤務時間外在校時間が年間360時間以下の教職員の割合 分掌業務における役割の明確化や定時退庁日における声掛けなどの取組等により、令和4年1月末現在で60%となり、目標を達成した。</p> <p>○年休を15日以上取得した教職員の割合 令和3年4月から令和4年1月までに、7.5日以上年休を取得した教職員の割合は、36%であり、現時点では目標を達成した。【参考】年休取得時間の計算は、1月～12月で行われているが、令和3年1月から12月までに7.5日以上年休を取得した教職員の割合は、34%であった。</p>
--	-------------------	--

- (1) 社会人基礎力を育成する。
- 服装検査において指導を受けなかった生徒の割合**
 目標を下回った大きな要因に、2学期以降からの違反の増加があげられる。2学期開始後に強化週間を設定するなど、生徒に身だしなみの意識を持たせ、新たな違反をする生徒を抑える取組が必要である。
- 時間厳守 登校遅刻をしていない生徒の割合**
 目標を大きく下回ったのは、2学期以降の生活習慣の乱れが大きいと考えられる。遅刻を繰り返す生徒について分析したところ、ネットゲーム等への依存も原因が一因となっている。情報機器に関するマナー教育の徹底が課題である。また、3年生の進路決定後の生活習慣の乱れも目立った。進路決定した3年生に対し、社会人としてのマナー講習などの効果的な取組を組み込む必要がある。
- 整理整頓 生徒による学校環境整備週間実施回数**
 目標を達成できているが、日常的な習慣へと結び付けていかなければならない。
- 挨拶励行 生徒対象アンケートによる肯定的評価の割合**
 目標値に届かなかった。積極的に挨拶をしてくる生徒がいる一方で、挨拶されなければ自らはしない生徒も多く、挨拶励行の内容を充実させなければならない。
- (2) 豊かな心を育成する。
- 生徒個別面談週間における面談実施回数**
 面談の内容や目的について、学年やクラスに差がある。学年やクラスでそれぞれの面談週間での内容や目的を明確にし、継続的、組織的な指導を行う必要がある。
- 一人当たりの年間貸出冊数**
 1年生の利用が全般的に少ない。「朝読」では個人所有の本を持ち込む生徒が大半であり、単なる「読書」目的では図書室利用にはつながりにくい。出張図書館（室外掲示）に興味を持つ生徒も2・3年生が主であった。各学科と連携し、PBLにつながる関連図書を充実させ、今年度入ったPCの活用も含め、情報センターとしての機能をより充実させる必要がある。
- (3) 進路実績を向上させる。
 第一志望に合格できていない生徒は、国公立大学や看護学校、公務員、就職試験の事務系など、志願倍率が高く、難易度が高い進路先を選んだ生徒であった。このような難易度が高い進路先にも合格できるように1・2年生の時から進路に向けての意識を高め、計画的に学習に取り組むことができる生徒を育成する必要がある。
- (4) 主体的で深い学びを実践する
- 専門科目におけるPBL実施率**
 各学科での実施数は、生物生産学科8科目、食品工学科2科目、環境工学科1科目、生活科学科1科目であり、専門科目での達成率は18%であった。そのため、各科目内でのPBLの実施率が低いことが課題である。
- アグリマイスタープラチナ取得生徒数**
 アグリマイスタープラチナの取得者は2名である。学校農業クラブの各種競技会での成績上位者や取得困難な資格取得者に対する学習支援体制をより一層確立していく必要がある。
- (5) 地域と協働した教育を実践する。
- 庄実版デュアル派遣実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合**
 生活科学科実習生の受け入れ先である医療、福祉、介護の分野での受け入れが困難な状況が継続している。この分野での現場実習の在り方について検討していく必要がある。
- インターンシップ実習生の事後アンケートにおける肯定的評価の割合**
 生活科学科実習生の受け入れ先である医療、福祉、介護の分野での受け入れが困難な状況が継続している。この分野での現場実習の在り方について検討していく必要がある。また、新型コロナウイルス感染症予防のため、インターンシップ実習中の生徒の移動を受け入れ先の事業者で実施できないことが課題である。
- 教科横断的な授業実践を行った科目数**
 全ての普通科目において教科横断的な授業実践を実施するため、各教諭間での連携を図ることのできる組織構築を進める必要がある。
- 地域の産学官との協働研究数**
 コロナ禍での社会状況への対応を行いながら、マイスター・ハイスクールCEOと連携して協働研究をさらに活性化させる必要がある。
- 地域との交流学習の実施回数**
 多くの交流学習先がコロナ禍において、地域社会状況を鑑みて交流を取りやめた。今後、新たな交流学習の実施方法を提案していく必要がある。
- (6) 情報発信を積極的に行う。
- マスコミ（テレビ、新聞等）への出現数**
 学校全体として、今後も一人一人が当事者意識を持ちながら適時的な情報発信に向けての意識を高めていく必要がある。
- (7) 業務改善を推進する。
- 勤務時間外在校時間が年間360時間以下の教職員の割合**
 業務分担をさらに見直すことにより、勤務時間外在校時間が多い教職員の負担を軽減していく必要がある。
- 年休を15日以上取得した教職員の割合**
 会議及び研修の実施日を精選するなどして、より一層休暇を取得しやすい行事予定や会議計画にしていける必要がある。

<p>今後の改善方策</p>	<p>(1) 社会人基礎力を育成する。 指導を受ける生徒が大きく増加した11月以降を想定し、早めに取組を進める。具体的には、3年生の受験が本格化する2学期初めに「服装指導強化週間」を設けることで生徒一人一人の自覚を促すようにする。 「遅刻防止週間」を学期初めに設定して、遅刻0の日を続けることを目標に時間に対する意識を向上させる。 美化委員による活動を積極的に広報活動することで、さらなる環境美化につなげる。 週1回実施している朝の挨拶運動を、生徒会執行部の生徒から拡大して多くの生徒にも参加できるように取組を進めていく。</p> <p>(2) 豊かな心を育成する。 本校で生徒に身に付けさせたい資質・能力を全教職員に周知徹底し、1年間で継続的な面談計画を立てる。面談での聞き取り内容を共有する仕組みづくりを行う。 図書委員会として、「図書だより」の発行等の活動を通して、読書の推進と図書の貸し出しについて啓発を図る。また、教科担当教員とより一層連携を深めながら図書室の活用を推進していく。このことで読書へ関心を高め、図書貸出についても啓発を図る。</p> <p>(3) 進路実績を向上させる。 生徒個々に合ったきめ細かい指導を実施し、志望先に合った対策を行う。進路がなかなか決まらない生徒に対しても、粘り強く最後まで組織的に対応する。</p> <p>(4) 主体的で深い学びを実践する 第1学年科目「農業と環境」において、未来思考型PBLに各科目で取り組んだことにより、生徒の学びに向かう姿勢が積極的になった様子が生徒の記述から伺えた。今後、専門科目のその他の授業においても目標を達成するためのPBLを展開することにより、取組の活性化を図り、生徒の内発的動機付けを高めていく。</p> <p>(5) 地域と協働した教育を実践する。 地域と協働した短期的な教育の実施については目標を達成しているため、3年間を見通し、継続的に地域と協働して実施する教育課程の構築を図る。また、地域を教材化することにより、地域の未来を創造することができる技能及び知識を生徒に習得させ、教科横断的な学習計画の充実に向けて専門科教員と普通科教員との協議がより活性化する組織体制の確立を図る。</p> <p>(6) 情報発信を積極的に行う。 今後も各種活動を継続しながら学校全体として、マスコミ等への情報提供を積極的に行うとともに、ホームページの更新も積極的に行いながら最新情報を発信する。一昨年度開設したインスタグラムの周知をより一層図るとともに、内容の更新も行う。</p> <p>(7) 業務改善を推進する。 定時退庁日に定時退庁を徹底する取組や、業務の役割分担に係る見直しを行うこと等により、引き続き、勤務時間外在校時間の縮減や年休取得の促進により一層努める。</p>
<p>学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>委員からの評価結果を参考にしながら、中期経営計画の2年目の取組及び令和4年度の短期経営目標に関わる目標値並びに評価方法について、具体的に検討を行う。検討した内容に関わって、全教職員で共有したうえで令和4年度の実践につなげていく。</p>